

周防大島中学校 研修通信

vol.16

的確な生徒理解のために

今年度も残り1週間となりました。修了式が終われば、2週間の春休みです。この2週間は、異動や新年度の準備で1年の中でも最も教員が忙しい時期であると思いますが、次年度に向けてスキルアップを図る時期でもあります。今回の研修通信では、特別支援教育に関するスキルアップのために、愛着障害に関する2冊の書籍を紹介したいと思います。

今月上旬に2冊の愛着障害に関する書籍が出版されました。どちらも愛着障害の臨床研究の第一人者である和歌山教育大学の米澤好史教授によるものです。米澤氏は今年の1月に心不全により急逝されたので、この2冊が遺作となってしまいました。全国的に愛着障害の児童生徒が増加し、それによる学級崩壊、学校崩壊が増えつつある中、その解決の道しるべをつけてくださる方が亡くなったのは大変残念ですが、これらの書籍に書かれた最後のメッセージをしっかり受け止め、目の前の生徒たちと向き合っていかなければと思います。愛着障害の理解に関して、町教委主催で今年の8月にオンラインで講演をしていただけたことになっている川上康則先生の『教室マルトリートメント』（坂井課長が今年1年間リーフレットで紹介されていた教育関連のベストセラーの本です。）という書籍の中の最後の友田明美教授（虐待など家庭でのマルトリートメント（適切でない指導）の研究者）との対談の一部を紹介します。

友田：愛着障害をご存じない先生もおられるのですかね。

川上：かなりいるように思います。翻弄されているケースもあれば、のめり込みすぎているケースもあります。愛着障害自体の研修がほぼないです。

友田：そこが問題ですね。学校の先生を責めるつもりは毛頭ありませんが、今、「発達障害」というものがどンドン独り歩きしていて、子どもに問題行動やいろいろな症状があったら、なんでもかんでも発達障害という診断となっているところがあります。（省略）

川上：友田先生がおっしゃっていた愛着障害に学校がどこまで貢献できるかということがポイントだと思うんです。教師も安全基地としての役割をきちんと果たさなければならぬ。それが子どもたちにとってのよりよい育ちに影響する。川上康則『教室マルトリートメント』 p281

自分自身も前任校にいくまでは、愛着障害という言葉を全く知りませんでした。生徒たちと接していく中で、発達障害と思えるのに発達障害の対応が上手くいかず、学校全体が疲弊している中で、米澤先生の著作に出会いました。発達障害という言葉は、この20年間で教員の中だけでなく、社会の中でも広がり理解が深まってきました。しかし、それとともに発達障害に関する誤った理解も広まっていき、発達障害と似ている問題行動が出るのに支援方法は異なる愛着障害は、なかなか浸透していかないのが現状です。特別支援教育の知識も、時代に合わせてアップデートして行く必要があるのではないかと思います。

そんな中、愛着障害の入門書として『愛着障害スペクトラム こどもの気持ち&支援スキル大全』は最適だと思います。マンガも用いられており、わかりやすくアタッチメント（愛着）や愛着障害のことについて学ぶことができます。また、第3章からは、具体的な問題行動ごとにその背景と具体的な支援策が記されています。そして、この書籍の最大の特徴は、愛着障害をスペクトラム（連続体）として捉えようという点です。

今現在、軽重様々な愛着形成に困難さを抱えた生徒がいるということを理解し、施設で育った子や虐待を受けた、特別な子のみが愛着障害を抱えているのではなく、どの子にも愛着形成不全の可能性があると受け止めることが求められているのではないかと思います。

もう一冊の『愛着障害のこどもが育つ!チーム対応の教科書 教育現場で、何から始めるのか』は、愛着障害へのチーム対応に焦点化されて記されています。第1章では、米澤先生によって「愛情の器」モデルに基づく愛情修復プログラムが具体的に記されており、その理論を深く学ぶことができます。2章では、綿密な学級経営で有名な藤原友和先生による、公立小学校の通常級での愛着障害児童のチームによる支援中心とした学級経営の1年間の体験記を読むことができます。また、3章では川上康則先生が愛着障害をもった児童生徒やその保護者とどう向き合っていくとよいかについて詳述されています。これら2冊はこれからの愛着障害を理解する上で必須の書籍となっています。興味があれば、ぜひ読んでみてください。

参考文献

川上康則『教室マルトリートメント』東洋館出版社 2022年

米澤好史『愛着障害スペクトラム こどもの気持ち&支援スキル大全』講談社2026年

米澤好文・川上康則・藤原友和『愛着障害のこどもが育つ!チーム対応の教科書 教育現場で、何から始めるのか』小学館 2026年



「親には言わないで」と訴えるこどもの心理

高所に上ることに限らず、たとえば火遊びなど、こどもがやってしまう危険行為にはさまざまなものがあります。そういった行為を制止し、注意・叱責したときに、「親には言わないで」などと訴えるこどもを見たことはないでしょうか。

一見するとこれは、「親を心配させたくない」(迷惑をかけたくない)という殊勝な気持ちのあらわれと映りますが、実はそうではありません。そのこどもが愛着の問題を抱えている可能性を示唆しています。

「親は何があっても、最後は自分を受け入れてくれる」と確信できていれば——つまり、親がこどもの安全基地になっていれば——こどもはそんな訴えはしないものです。「親は守ってくれない/守ってくれないかもしれない」(それどころか叱られるかもしれない)、だから、自分がしたことが親に伝わらないようにして自分を守るしかない……こどもの「言わないで」という訴えは、そんな屈折した自己防衛だと捉えるべきなのです。